

研究ノート

先スペイン期アンデスのワリ文化の奉納儀礼について ——ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡の事例——

渡部 森哉

キーワード

奉納儀礼、ワリ、カハマルカ、ケーロ

1. はじめに

南米大陸の西部のアンデス地帯ではいくつもの国が盛衰を繰り返した。先スペイン期の最後にあたる15世紀から16世紀にはインカ帝国が台頭し、南北4000キロメートルという広大な範囲の住民を支配下に治めた。しかし、1532年11月、フランシスコ・ピサロが率いるスペイン人一行の軍門に降った。

インカ帝国が急速に支配域を広げることができた理由については様々な説明がなされている (Conrad and Demarest 1984; ロストウォロウスキ 2003[1988]; 渡部 2010)。各説の妥当性はともかく、インカ帝国が先行文化の成果を吸収した、古代アンデス文明の集大成であり、突如として何もなかったところに現れたわけではないことは明らかである。特に9世紀から10世紀にかけて勢力を拡大した、古代アンデスの初期帝国とされるワリと呼ばれる社会が、インカ帝国成立の基盤になったと考えられている (ルンブレラス 1997[1974]; ロストウォロウスキ 2003[1988]: 47-48)。しばしばワリ帝国からインカ帝国への連続性が指摘されている。例えば、インカ帝国で採用された、各地に行政センターを配置し、それらを道路で連結するという地方支配の方法が、ワリ帝国においても実験的に行われていた (渡部 2014a)。さらに従来インカ族の残党がスペイン人への抵抗した際の拠点であると考えられていたエスピリトゥ・パンパ遺跡で、2011年にワリ帝国期の建築や墓が発見されるなど、実際にインカとワリをつなぐ直接的証拠が存在する (Fonseca & Bauer 2013; Isbell 2016)。

インカ文化のいくつかの要素の先行形態がワリ文化に認められるが、その中で本論文は奉納儀礼を取り上げ論じる。まずインカ文化の奉納儀礼について概観し、次にワリ文化の奉納儀礼について具体的発掘データを基に論じる。最後にワリ文化の特徴について、インカ文化と比較しつつ考察する。

2. インカ文化の奉納儀礼



図1 ケーロを持つインカの武将 (Guaman Poma 1987[ca. 1615])

インカ帝国では様々な儀礼が行われた。インカ文化を特徴付ける要素は様々あるが、考古学的に認定しやすいのは、建築と土器である。インカの遺跡と認定される場所でほぼ必ず出土するのは、アリバロスと一般に呼ばれる尖底壺であり、トウモロコシで造った酒を入れるのに用いられた。大型土器を用いる場合は、床の上に輪状の台座を置き、そこに安定させた。インカのお祭りでは大量にお酒が振る舞われ、ケーロと呼ばれる木製のコップに入れて飲まれた(図1)。ケーロは2個1組で使用され、例えばインカ王と地方首長などの間で酒が酌み交わされた。また金属製のコップはアキリヤと呼ばれ、金製、銀製などがあり、使用する人の身分によって使い分けられた。アンデスにおける飲酒儀礼は非常に根強く、植民地時代になってもケーロの製作は続けられた(Cummins 2002)。それはアリバロスなどのインカ様式土器の製作が植民地時代にたちまち消えていったのとは対照的である。

インカ帝国の各地では、カパクチャと呼ばれる奉納儀礼が行われた。それはアンデスの土地の中の至る所に存在する聖なる場所ワカに奉納を行う儀礼である(アリアーガ 1984[1621])。アンデスでは、自然の中の様々な場所、例えば山の頂、泉、岩、島、湖、川の合流点、遺跡などを聖なる存在と考え、そこに奉納物を捧げた。時には、人間の子供が捧げられるという一種の人身御供が行われた。実際に中央アンデス南部の山岳地帯の発掘調査で子供の奉納の存在が確認されている(ラインハルト 2007[2005])。

以下では、こうしたインカ文化の儀礼要素がワリ文化にも認められることを具体的な発掘データに基づき論じる。事例として取り上げるのは、ペルー北部高地カハマルカ地方に位置する、ワリ帝国の行政センターであるエル・パラシオ遺跡である(渡部 2009a, 2012, 2014a; Watanabe 2011, 2014b, 2016)。

3. エル・パラシオ遺跡

ワリ帝国は地方支配のための拠点として各地に行政センターを設置した。現在まで確認されている山地における最北のセンターがエル・パラシオ遺跡であり、2008年から始まった発掘調査によってその詳細が明らかとなった(図2)。

ワリ帝国の行政センターには大きく2つのタイプが認められる(渡部 2014a)。1つは長方形の直交する建築構造を基本とするものであり、多くの場合外壁を先に立て、次に内部を分割するという建設順序に従っている。また拡張する場合、水平方向に広がるという特徴を示している。ペルー南高地に位置するピキリヤクタ遺跡(McEwan [ed.] 2005)や北高地のビラコチャパンパ遺跡(Topic 1991)がその例であり、こうした遺跡は多くの場合地表

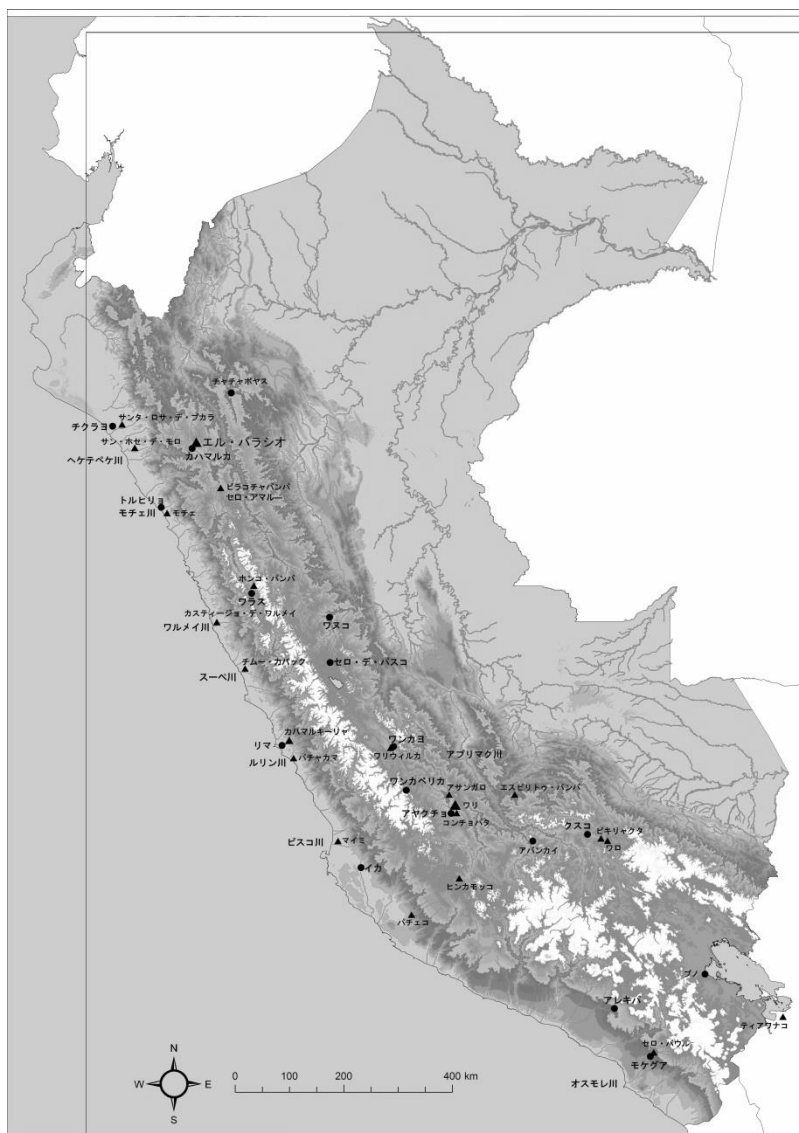


図2 エル・パラシオ遺跡および関連遺跡の位置

から建築構造が大まかに確認できるため、20世紀の半ばから注目され報告されてきた (Isbell and McEwan [eds.] 1991)。2つ目のタイプは、不規則建築の集合であり、各建築単位の間には空間が残され、また同じ場所で建て直しがされることが多く、墓や奉納をしばしば伴う。各建築単位が連結されていない場合は、それぞれ方向軸が異なる場合が多い。また、ワリ文化の文化要素である上から見るとD字形の建築構造は、第2タイプのセンターでのみ確認されている (Cook 2001)。首都ワリ遺跡、その付近にあるコンチョパタ遺跡、ペルー南部のセロ・パウウル遺跡などが例である。

そしてエル・パラシオも第2タイプのセンターであり、同じ場所で建て直しが行われており、多くの墓や奉納が確認されている¹。

エル・パラシオにおける出土土器の9割以上が在地のカハマルカ文化のものであり、ワリ文化やペルー北海岸系の土器は全体の中では少数である。ワリ様式土器が全出土土器の中で少ないというパターンは他の行政センターでも同様に認められている (Schreiber 1992)。一方で建築様式と墓の特徴はワリ文化の特徴を示している。アクセスの制限、厚い壁などは典型的なワリ文化の建築要素である。また半地下式の墓室も在地のカハマルカ文化ではなく、ワリ文化の特徴である (Watanabe 2011)。

エル・パラシオ遺跡では何度も建物の建て直しがされたことが確認されている。その都度、例えば壁の基礎に墓を作る、床面の上に奉納物を置くなどの行為が行われた。今回注

¹ A区の建築物は第1タイプの建築の特徴を有しているが、エル・パラシオ遺跡の最終期にあたるカハマルカ後期のはじめに建設が始まり、完成前に放棄されている (Watanabe 2011)。

目するのはB1区²の、約3m×3.6mの大きさの長方形の部屋状構造R13で検出された奉納のコンテキストである(図3a、図3b、図3c)。そこでは平石を敷き詰めた床の上で大量の土器片が出土し、B区奉納5(Ofr 5)として登録された。この奉納は在地のカハマルカ文化の編年に従えばカハマルカ中期C3³(A.D.850-950)に対応するが、この時期にエル・パラシオの至る所で奉納が行われ、古い持期の建築物が埋められ新しい建設活動が始められた。そして奉納5の土器片のほとんどがカハマルカ文化のものではなくワリ文化のものであった。奉納5で確認された土器について記述する前に、ワリ文化の奉納儀礼について簡潔に述べておきたい。

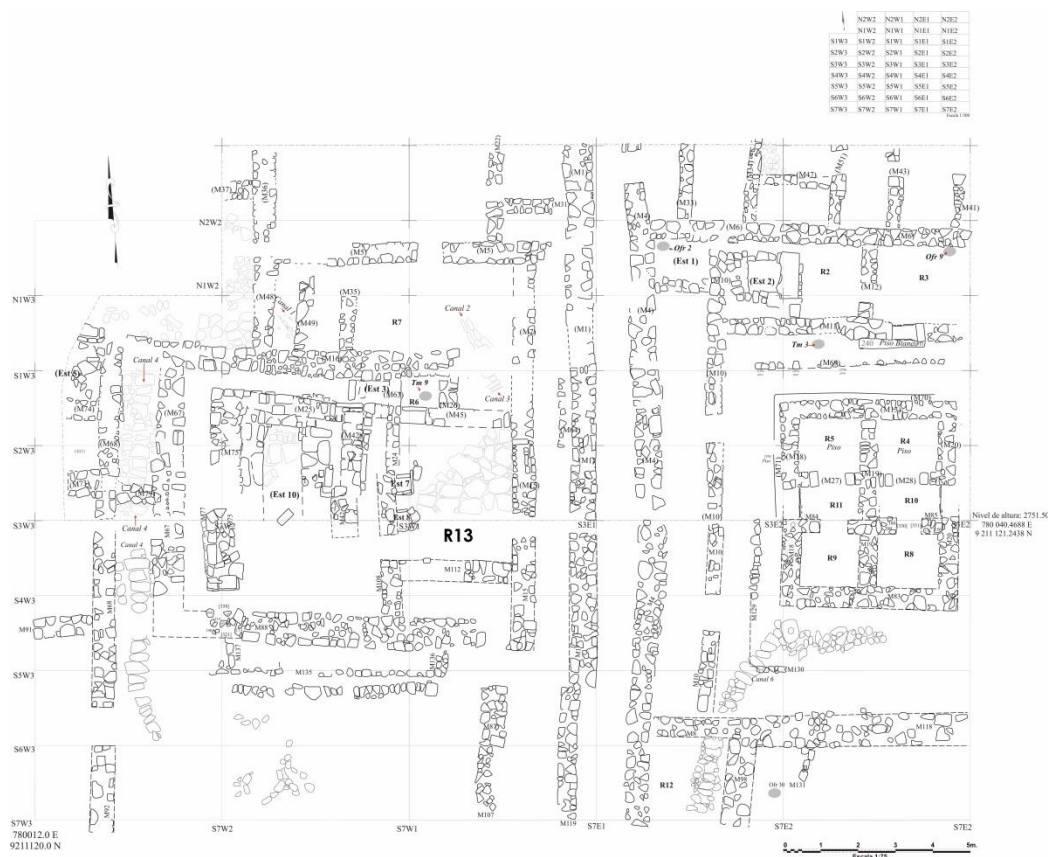


図3a カハマルカ中期B1①

² これまで調査を行った発掘区は、A区、B1区、B2区、C1区、C2区、C3区と命名された。

³ カハマルカ中期は中期A(後600-750年)、中期B(後750-850年)、中期C(後850-950年)に細分される。



図3b カハマルカ中期B②



図3c カハマルカ中期C (Ofr 5が奉納5)

4. ワリ文化の奉納儀礼

ワリ文化は20世紀の初めにはティワナク文化と混同されていたが、ようやく20世紀半ばに両文化が別個のものであり、それぞれ中心地があることが明らかとなった(Isbell & McEwan 1991)。現在ではワリ文化の中心はペルー中央高地南部のワリ遺跡で、ティワナク文化の中心はボリビアにあるティアワナコ遺跡であり、両遺跡を中心に国家的社会が存在したと考えられている(Isbell 2008, 2009; Janusek 2008; Kolata 1993)。両文化が混同されたのは、ティアワナコ遺跡の太陽の門という石の門に刻まれた両手に長いものを持った人物とほぼ同じ図像が、ワリ文化の土器などに描かれていたからである。特に高さ60cmもある広口の大型瓶が有名である(Menzel 1977)。大型土器はワリ遺跡のそばに位置するコンチョパタ遺跡で1942年に発見されており、またペルー南海岸のパチェコ遺跡でも確認されていた。しかし土器は割れており、断片的であったため、それが一体どのようなコンテキストで見つかったのか不明であった。1977年にコンチョパタ遺跡から同様のコンテキストが発見されたが、土器は同様に完形ではなく、粉々に割られていた(Cook 1987; Isbell 1987)。どうやら意図的に壊されたようである。

その後ペルー南高地クスコ地方にあるワロ遺跡群のバタン・ウルク遺跡で大型土器が発見され、それが建築の建て直しに伴い埋められたものであることが確認された(Zapata 1998)。こうしてワリ文化の大型土器の使用方法に関する長い間の疑問が氷解した。ワリ文化では建築の更新を行う際に、土器を意図的に割り、埋めるという儀礼を行っていた。そして大型土器にはティワナク文化と共通する図像が描かれていたのであるが、それは半永久的に残る石彫とは異なり、使用后、破壊された。つまり繰り返し行うことを前提とした儀礼であったのである。ただし元々使用されていた土器が最終的に割られて埋められたか、儀礼のために大型土器が製作され割られたのかは不明である。

地方におけるワリ文化の証拠は、大きく3つに分類することができる。1つは各地に存在する行政センターである(Isbell and McEwan [eds.] 1991)。2つ目は墓に伴う副葬品であり、この場合は在地のエリートがワリ文化の土器を取り入れたのだという解釈がしばしばなされる(Castillo 2001)。3つ目がいわゆる奉納儀礼である。これはワリ以前に活動の中心であった場所に行われる場合が多く、北海岸のモチェ遺跡の太陽のワカ(Uhle 1998[1903])、中央海岸のカハマルキーリャ遺跡のワカ・テーヨと呼ばれる建物(Sestieri 1971)、スーペ谷のチムー・カパック遺跡(Menzel 1977)、ワマチュコ地方のセロ・アマルー遺跡(Topic & Topic 1984)などで確認されている。すでに放棄されていた遺跡に奉納が行われる場合もあるが、それまで利用されていた建物に奉納が行われ、その後その建物が放棄されるというパターンが多い。いわば奉納によって、それまでの活動の場が聖なる場であるワカに変容するという現象である(Swenson 2011)。

以上のように、ワリ文化の奉納儀礼が、現状維持、継続性を示すのではなく、変化をもたらす、変化に伴うものであることは明らかである。

5. エル・パラシオ遺跡B区の奉納5

エル・パラシオでの奉納は、床面直上に完形土器が置かれ、そのまま埋められるという場合が多いが、B 区の奉納 5 は異なり、意図的に複数の土器が割られていた。閉じられた空間内での儀礼であるので、そのままの状態では埋められたなら、かなりの割合で土器を接合し、本来の個数が十分な精度で復元できたであろう。しかし運が悪いことに、植民地時代にそこに溝が掘られ、壁の基礎が据えられた。溝は床の平石の下まで掘り込まれていたため、溝内部の土器片は失われてしまった。また奉納 5 は 2010 年の第 2 次発掘調査の際に検出されたが、時間的制約のため完掘できず、建築のどの部分にあたるのかが分からなかった。2012 年の第 3 次発掘調査でようやく 3m×3.6m の大きさの長方形の部屋の内部で行われた奉納の痕跡であることが確認でき、入手できる全てのピースがそろった状態で接合作業を開始した。しかし、ワリ文化では意図的に土器を割るため、原位置で土器を確認したとしても全ての破片がそろっていることはなく必ず一部が欠損している。これは他の遺跡でも同様である。おそらく土器を割った際に土器片が散逸してしまうためか、別の場所で割られた土器片が廃棄されたからであろう⁴。エル・パラシオにおける奉納コンテキストにおいても同様であり、完形近くまで接合できる例は少なかった。しかし、最小個体数と、土器の大まかな特徴を把握することはできた。

奉納 5 で確認された土器の多くは、いわゆるケーロ形の平底鉢、すなわちコップ形土器であった。インカ文化では木製のコップが使用されることが多く、土器は少ないが、ワリ文化、ティワナク文化ではコップ形の土器が多く製作され、それらの多くに多彩色で図像が描かれた。奉納 5 のケーロ形土器は通常のケーロよりもかなり大きく、高さ 30cm ほどのものが主であった。そしてこれらのケーロ形土器は全て、中央より少し上に帯状隆起を伴っていた。そして帯状隆起の上の部分に人面を立体的に表現したものが多かった。そして最も重要なのは、これらのケーロが 2 つペアで製作されていたという事実である。ペアとなる 2 個のケーロ形土器は、大きさがほぼ同じで、紋様などが少しだけ異なるという特徴を示している。確認されているだけで 15 個体あるため、少なくとも 8 ペアはあったことになる。

インカ帝国における木製ケーロも、全く同じもの 2 個ではなく互いに少しだけ異なる。これはアンデス地域におけるデュアリズムの特徴を示している。例えば、アンデスでは一般的に男の子の双子 2 人のうち 1 人のみが稲妻の子と認定され、神官になるのがふさわしいとされる (アリアーガ 1984[1621])。そして男性デュアリズムについては儀礼の場で頻繁に認められるが、女性のデュアリズムは認められない (Rostworowski 1983)。

これまでワリ文化、ティワナク文化において土器が 2 個 1 組で製作されたという明確な事例は報告されていなかったが、エル・パラシオ遺跡ではじめて確認された。またケーロが 2 個 1 組で使用されるということは、ワリ文化よりも後のランバイエケ文化でも確認されており (カミンズ 2012)、インカ文化まで連続的に引き継がれている。2 個 1 組で製作され、使用されるということは互酬的相互関係を促す特徴として理解されている。今後、この特徴がどこまで遡るか、発掘データを増加させ検証する必要がある。またエル・パラ

⁴ 儀礼的にものを捨てるという行為については松本 2013 を参照。

シオ遺跡のケーロ形土器は意図的に割られていたが、土器を意図的に壊すという特徴はワリ文化に先行するペルー南海岸のナスカ文化にも認められる。ワリ文化の多彩色土器製作はナスカ文化の系譜を引くものであり、それと共に土器を割る儀礼も継承されたと言える。

次にエル・パラシオ遺跡 B1 区の奉納 5 の土器について記述する。

第 1 ペアは高さ約 32cm、口縁の直径 20cm の大きさの土器である(図 4 a および図 4 b)。褐色のシンプルな土器であり、中央部の帯状隆起以外に、人面表象や紋様などの特徴はない。

第 2 ペアは口縁がやや外反し、底部がやや丸みを帯びた明褐色のケーロ形土器である(図 5 a および図 5 b)。口縁下の帯状隆起には縦方向に二重刻線が刻まれ、長方形の単位に分割されている。口縁の直径はいずれも 21cm である。底部が欠損しているため正確な高さは不明である。

第 3 ペアのケーロ形土器は褐色で、帯状隆起を刻線でジグザグにいくつかの三角形に区画するという特徴を有している(図 6 a および図 6 b)。1 つは二重刻線で区画し、刻線の上部の三角形の空間を刺突紋で施紋している。もう 1 つは一本の刻線で区画し、刻線の下部を刺突紋で施紋している。いずれも帯状隆起よりも上に三角形の人面が表現されており、あごの部分が帯状隆起にかかっている。最大径が約 24cm、底部の直径が約 16cm である。高さは不明である。

第 4 ペアは、橙地赤彩のケーロ形土器である(図 7 a および図 7 b)。口縁部が赤で塗られ、帯状隆起と口縁部の間に、内部を塗りつぶした赤円文をさらに円で囲んだ紋様が施されている。中央には人面が表現されており、顔を四分割され、右上と左下が赤で塗られている。また器壁には顔から見て横方向の位置に耳状突起が 2 つある。帯状隆起は人面の付近から始まり顔の裏側を通っている。その先端部から上方向には手の形の浮紋が、下方向には縄状浮紋があごの下の首の部分を通るように施されている。帯状隆起はジグザクの刻線で三角形に区画されており、区画 2 つを刺突紋で施紋し、1 つには刺突紋を施さないという順序で施紋している。口縁部の直径は約 17cm であるが、高さは不明である。

第 5 ペアは、第 4 ペアと同様に、橙地赤彩のケーロ形土器である(図 8 a および図 8 b)。口縁部が赤色で塗られており、第 4 ペアとは異なりさらにその下に赤線が 1 本横方向に施されている。中央に人面が施され、四分割され右上と左下が赤で塗られている。帯状隆起はジグザクの刻線で三角形に区画され、刻線の上部の三角形の部分が刺突紋で施紋されている。帯状隆起は顔から始まっており、先端から縄状紋様が円弧状にあごの下の首の部分を通るように描かれている。また先端から手が上方向に伸び、外方向に曲がっている。口縁部の直径は約 18cm である。正確な高さは不明である。

第 6 ペアはシンプルな褐色のケーロ形土器である(図 9 a および図 9 b)。帯状隆起とその上の人面表象、耳状突起 2 つ以外に目立った特徴は無い。口縁部の直径は約 20cm である。

第 7 ペアは、人面が表現され、その下の帯状隆起がジグザクの刻線で三角形に区画され、1 つ(図 10 a)は線の上部の三角形に、もう 1 つ(図 10 b)は下部に円状刺突紋が施されている。褐色で口縁部の直径は約 20cm である。少なくとも 1 つ(図 10 b)は帯状隆起の先端から手が伸びていると考えられる。

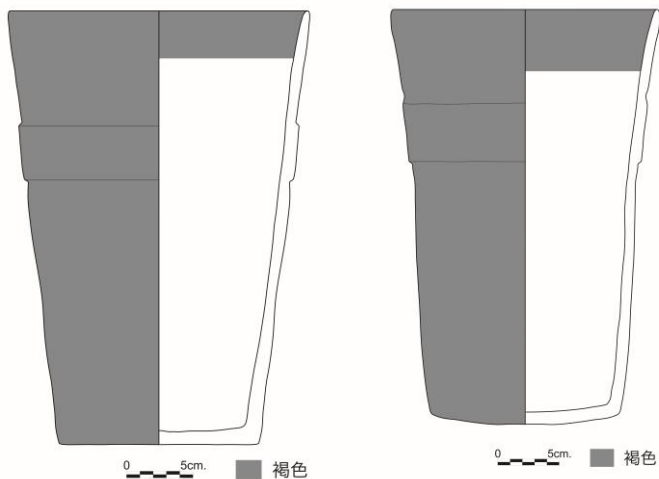


図 4 a ケー口形土器第 1 ペア a 図 4 b ケー口形土器第 1 ペア b

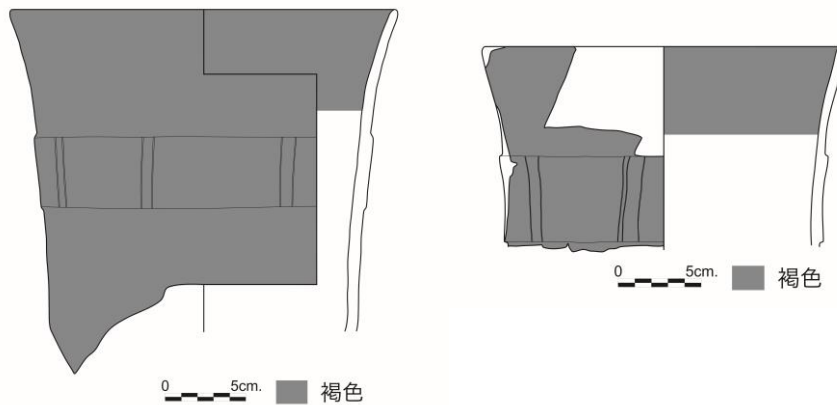


図 5 a ケー口形土器第 2 ペア a 図 5 b ケー口形土器第 2 ペア b

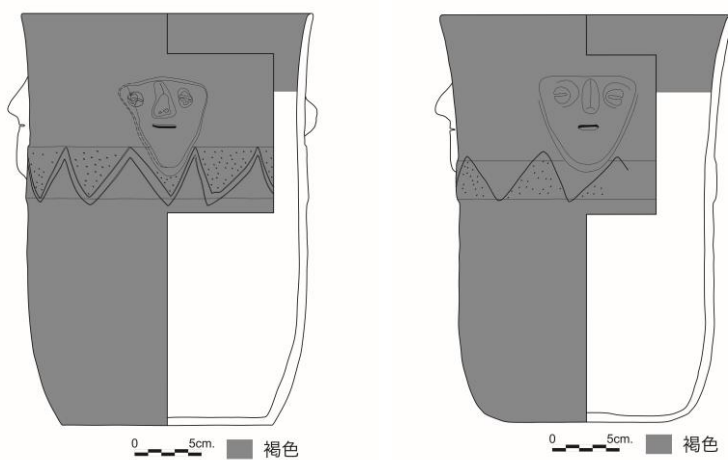


図 6 a ケー口形土器第 3 ペア a 図 6 b ケー口形土器第 3 ペア b

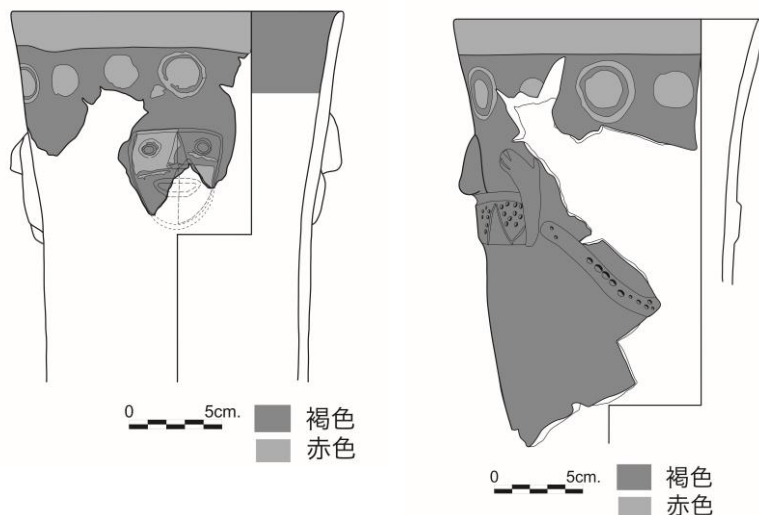


図7a ケー口形土器第4ペア a

図7b ケー口形土器第4ペア b

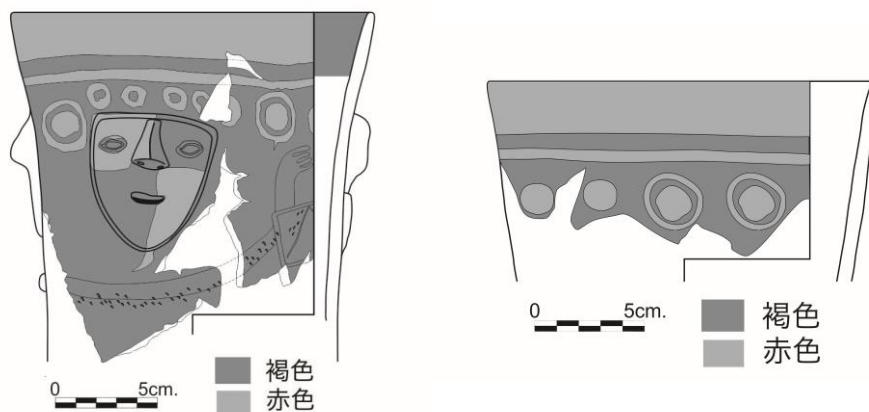


図8a ケー口形土器第5ペア a

図8b ケー口形土器第5ペア b

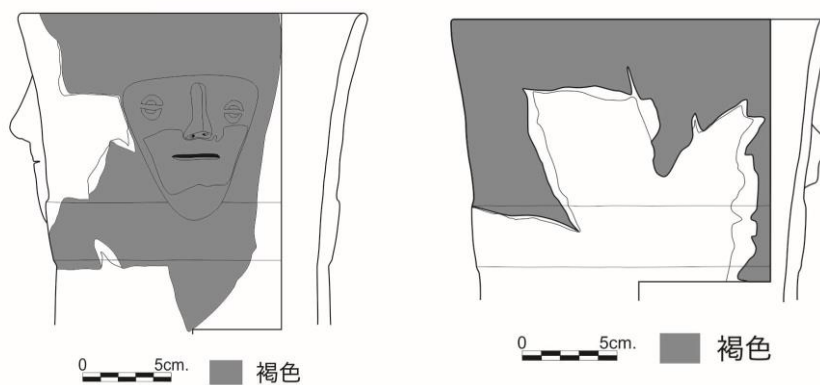
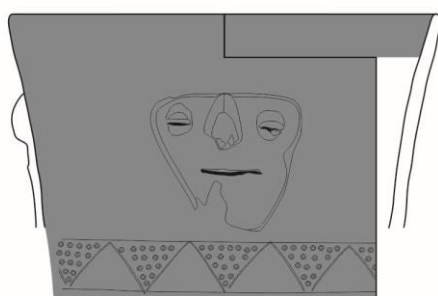


図9a ケー口形土器第6ペア a

図9b ケー口形土器第6ペア b

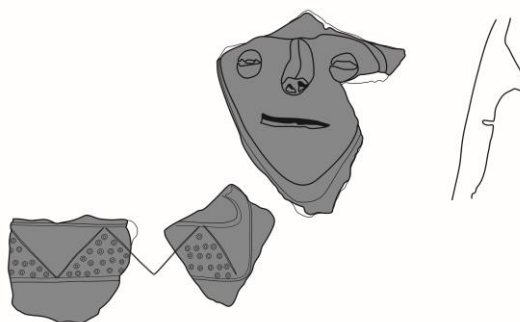
なおケーロ形土器がもう 1 つ見つかったがそれとペアとなるケーロは確認できていない。人面が施され、刻線のない帯状隆起を伴っていると思われる (図 1 1)。

以上、少なくとも 8 ペアのケーロが奉納 5 から見つかった。それ以外の土器片も含まれていたが、多くはカハマルカ文化の粗製土器であり、紋様を施したカオリン土器などはなかった。またケーロ形土器と同様の帯状隆起を伴う土器片が他のコンテキストからも出土しているため、ケーロ形土器は奉納 5 に限定された特別な土器であるわけではない。また高さ 30cm もある大型コップにお酒を注ぐのであるから、お酒を造るのにはより大きな器が利用されたはずである。しかし、いくつかの他の遺跡で確認されているワリ様式の大形土器は、エル・パラシオ遺跡では未確認である。エル・パラシオにおいてはお酒の醸造のためにカハマルカ文化の粗製土器である Cajamarca Coarse Red の瓶などが利用されたのであろう (Terada & Onuki [eds.] 1982)。



0 5cm. ■ 褐色

図 1 0 a ケーロ形土器第 7 ペア a



0 5cm. ■ 褐色

図 1 0 b ケーロ形土器第 7 ペア b



0 5cm. ■ 褐色

図 1 1 ケーロ形土器の破片

6. 考察

エル・パラシオ遺跡のB区の奉納5から、ケーロ形土器が2個ペアで用いられたことや、それらが意図的に壊されたという重要な事実が明らかとなった。この事実から何を読み取ることができるであろうか。ケーロ形の器を2個1組で使用するというインカ文化の特徴は、少なくともワリ文化まで遡ることが明らかとなった。しかしながらこの特徴が、ワリ関連遺跡で繰り返し確認されているかという点、そうではない。2個1組という発想は、建築模型形土器など他の事例でも確認されているが(土井正樹私信 2014年12月)、ケーロ形土器が2個1組で製作・使用されたという事例が報告されたのは初めてである。おそらくアンデスにおけるデュアリズムの考え方が根本にあり、それが様々な媒体に表象されたのであり、エル・パラシオ遺跡の場合はケーロ形土器であった。2個1組という同様の状況は、B区第2号墓出土の灰色猫科動物表象土器にも認められる(図12)。また土器を意図的に割るという習慣はワリ文化の特徴であり、多くの遺跡で繰り返し確認されている。



図12 灰色猫科動物表象土器
(エル・パラシオ遺跡B1区出土、
高さ28cm)。2個体のうちの1つ

土器を割るという行為はワリ文化の特徴であるが、2個1組のケーロ形土器が割られるというコンテクストは首都ワリ遺跡、あるいはその付近で確認されてはいない。従って、土器製作といっても、中央の特徴がそのまま地方に広まるわけではなく、各地の状況に応じて取捨選択され、またある程度改変されながら取り入れられているのである。

ケーロ形の器形にもバリエーションがある。エル・パラシオ遺跡の他のコンテクストで出土した土器は高さが低く横に広い形の褐色ケーロ形土器であり(図13)、またC3区の第4号墓の副葬品として出土した黒色ケーロ形土器は帯状隆起の下側に顔が施されている(図14)。エル・パラシオ遺跡におけるケーロ形土器の器形の多様性については、今後他遺跡のデータと比較検討して理解していく必要がある。

インカ帝国はインカ族という支配者集団が、他の80以上の民族集団を支配下に治めた多民族国家であった。土器の組成や人物表現の多様性から、ワリ帝国も同様に多民族の特徴を有していたと考えられる。しかしながら、どのぐらいの数の民族集団がいたのか、それぞれの程度の規模であったのか、などについてはよく分かっていない。民族集団という単位が実体的なものではなく、政治的なまとまりであり、操作されるものであるとして、それを識別する物質的な指標があれば考古学的に議論できるはずである。インカ帝国では各民族集団は頭飾りで識別されていたというが、それらを考古学的な遺物として確認できることはほとんどない(渡部2009b)。さらに集団ごとに個別の土器様式を用いていたかと

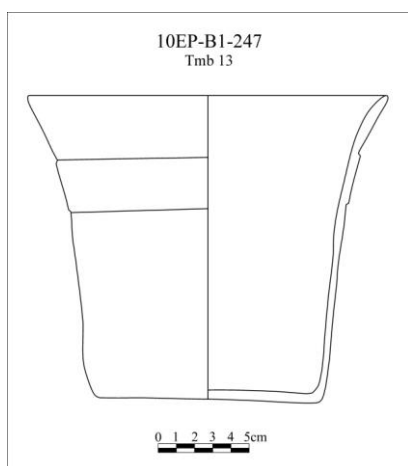


図 13 ケーロ形土器 (エル・パラシオ遺跡 B1 区第 23 号墓)



図 14 黒色ケーロ形土器 (エル・パラシオ遺跡 C3 区第 4 号墓、高さ 11cm)

いうとそうではなく、多くの行政センターではもっぱらインカ様式土器が用いられた。さらにインカ文化では人物表現が極端に少なく、図像表現を手がかりとして民族集団を再構成することも難しい。

一方、ワリ帝国の支配下では、ワリ様式土器が支配域に遍く広まり主流となるということではなく、出土土器の大部分は各地で製作された在地の土器である。また、インカ様式土器と異なり人物表現も多く、それを基準として少なくとも何種類の人物が図像に表現されているかを整理することは可能である。それらがそのまま民族集団に対応すると簡単に想定できるわけではないが、それを考えるヒントになることは確かである。各地方においてワリ文化がどのように取り入れられているのか、そして人物がどのように表現されているかは、ワリ帝国における地方支配、そしてその変化、さらにはワリ帝国の衰退、変容の背景を知るための手がかりとなるはずである。

ではケーロ形土器に表現された人面は一体誰なのであろうか。顔を 4 分割し、右上と左下を赤色に塗るという特徴 (図 7a および図 8a) は、ワリ文化の人物表現にしばしば見られる特徴であり、特にエル・パラシオ遺跡では頻繁に認められる (図 15)。この表現が、特定の民族集団、あるいは特定の身分や役割を示すのかについては分かっていない。また、この人物の首の部分に縄が表現されていることは、この人物が捕縛されていることを示しているようである。首の部分に縄を伴う人物表現は他の土器にも認められる (図 16)。さらに、

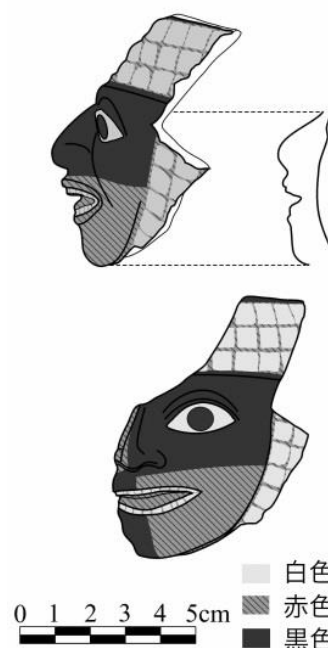


図 15 顔を四分割した人物を表現した土器片 (エル・パラシオ遺跡 B1 区)

顔を4分割した人物がジャガーの顔をした人物に捕縛されている図像を施した骨角器も見つかっている(Watanabe 2002: Fig. 17)。さらにワリ文化の遺物の中には、他に手を背中で縛られている人物表現などもある(Cook 1992; Watanabe 2002: Fig. 15, Fig. 16)。これらの人物表現はワリ帝国内の人間集団間関係を明らかにする手がかりとなるであろう。一方、ケーロ形土器に表現された四分割されていない人面は、首に縄を伴っていないため、別の集団を示しているのかもしれない。

今回報告した奉納は、建築の建て替えに伴うことが分かっている。同じ場所で建築の建て替えを行うのは、第2タイプの行政センターに認められる(渡部 2014a)。例えば、クスコに位置するワロ遺跡群のバタン・ウルク遺跡などである。また首都ワリ遺跡でも確認されている。しかしながら第1タイプの行政センターは、横方向に拡張するため、下に古い建築が埋まっているわけではない。

またピキリヤクタ遺跡では床下に奉納が発見されたこともあるが(Tuni & Tesar 2011)、そうした事例は非常に少ない。また不規則建築が集合する第2タイプの行政センターでも、建て替えを行わない場合もある。ワリ関連遺跡の中で、エル・パラシオは特殊な事例なのかもしれない。

アンデスでは、建築を立て替えるという習慣が形成期(前3000-50年)の時代から認められ、モチエ文化(後1-800年)の遺跡などに引き継がれている。内部に古い建物を埋め込むため、結果的に建物は大規模になる。そのため、巨大な建築のサイズがそのまま権力の大きさを示すわけではない(渡部 2013)。土器を壊すことや古い建物を埋めることはそれまでの流れをリセットすることであり、それによって新たに労働が必要になる。継続性、保存を重視する儀礼とは異なり、結果的にはあれ、変化をもたらす儀礼である。古いものを放棄し、新しいものを作り出していくという特徴はインカ文化にも認められ、そうした行為と連動して、労働が常に生み出されていくのである。こうしたアンデスにおける経済的特徴については稿を改めて論じたい。

謝辞

本研究はJSPS 科研費JP23682011、JP19682004の助成、2016年度南山大学パツへ研究奨励金I-A-2の助成を受けたものです。



図16 首の下に縄のある人物を表現した土器(エル・パラシオ遺跡B1区)

参考文献

Arriaga, Pablo José de (アリアーガ)

1984[1621] 「ピルーにおける偶像崇拜の根絶」『ペルー王国史』大航海時代叢書第II期 16、増田義郎訳、pp. 363-606、岩波書店。

Castillo, Luis Jaime

2001 “La presencia de Wari en San José de Moro”, *Boletín de Arqueología PUCP* 4[2000]:143-179.

Conrad, Geoffrey W. & Arthur A. Demarest

1984 *Religion and Empire: The Dynamics of Aztec and Inca Expansionism*, Cambridge: Cambridge University Press.

Cook, Anita G.

1987 “The Middle Horizon Ceramic Offerings from Conchopata”, *Ñawpa Pacha* 22-23[1984-1985]: 49-90.

1992 “The Stone Ancestors: Idioms of Imperial Attire and Rank among Huari Figurines”, *Latin American Antiquity* 3(4): 341-364.

2001 “Huari D-shaped Structures, Sacrificial Offerings, and Divine Rulership”, In E. P. Benson & A. G. Cook (eds.), *Ritual Sacrifice in Ancient Peru*, pp.137-163, Austin: University of Texas Press.

Cummins, Thomas B. F.

2002 *Toasts with the Inca: Andean Abstraction and Colonial Images on Quero Vessels*, Ann Arbor: University of Michigan Press.

Cummins, Thomas(カミンズ、トマス)

2012 「インカ美術」、島田泉・篠田謙一(編)『インカ帝国—研究のフロンティア—』、武井摩利訳、pp.209-239、東海大学出版会。

Fonseca Santa Cruz, Javier & Brian S. Bauer

2013 “Dating the Wari Remains at Espiritu Pampa (Vilcabamba, Cuzco)”, *Andean Past* 11: 111-122.

Guaman Poma de Ayala, Felipe

1987[ca.1615] *Nueva Crónica y Buen Gobierno*, Edición, introducción y notas de John V. Murra, Rolena Adorno y Jorge L. Urioste, Madrid: Historia 16.

Isbell, William H.

1987 “Conchopata, Ideological Innovator in Middle Horizon 1A”, *Ñawpa Pacha* 22-23[1984-1985]: 91-126.

2008 “Wari and Tiwanaku: International Identities in the Central Andean Middle Horizon”, In H. Silverman & W. H. Isbell (eds.), *Handbook of South American Archaeology*, pp.731-759, New York: Springer.

- 2009 “Huari: A New Direction in Central Andean Urban Evolution”, In L. R. Manzanilla & C. Chapdelaine (eds.), *Domestic Life in Prehispanic Capitals: A Study of Specilization, Hierarchy, and Ethnicity*, pp.197-219, Memoirs of the Museum of Anthropology, University of Michigan, Number 46, Studies in Latin American Ethnohistory & Archaeology, Volume VII, Ann Arbor: The Museum of Anthropology, University of Michigan.
- 2016 “El Señor Wari de Vilcabamba y sus relaciones culturales”, In M. Giersz & K. Makowski (eds.), *Nuevas Perspectivas en la Organización Política Huari*, pp.39-90, Andes: Boletín del Centro de Estudios Precolombinos de la Universidad de Varsovia No 9, Varsovia-Lima: Centro de Estudios Precolombinos / Instituto Francés de Estudios Andinos.
- Isbell, William H. & Gordon F. McEwan (eds.)
- 1991 *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*, Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Isbell, William H. & Gordon F. McEwan
- 1991 “A History of Huari Studies and Introduction to Current Interpretations”, In W. H. Isbell & G. F. McEwan (eds.), *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*, pp.1-17, Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Janusek, John Wayne
- 2008 *Ancient Tiwanaku*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Kolata, Alan L.
- 1993 *The Tiwanaku: Portrait of an Andean Civilization*, Cambridge MA & Oxford UK: Blackwell.
- Lumbreras, Luis (ルンブレラス、ルイス)
- 1977[1974] 『アンデス文明—石期からインカ帝国まで—』、増田義郎訳、岩波書店。
松本 雄一
- 2013 「神殿における儀礼と廃棄—中央アンデス形成期の事例から—」『年報人類学研究』3: 1-41。
- McEwan, Gordon F. (ed.)
- 2005 *Pikillacta: The Wari Empire in Cuzco*, Iowa City: University of Iowa Press.
- Menzel, Dorothy
- 1977 *The Archaeology of Ancient Peru and the Work of Max Uhle*, Berkeley: P. H. Lowie Museum, University of California.
- Reinhard, Johan (ラインハルト、ヨハン)
- 2007[2005] 『インカに眠る氷の少女』、畔上司訳、二見書房。
- Rostworowski de Diez Canseco, María (マリア・ロストウォロフスキ)

- 1983 *Estructuras Andinas del Poder: Ideología Religiosa y Política*, Lima: Instituto de Estudios Peruanos.
- 2003[1988] 『インカ国家の形成と崩壊』、増田義郎訳、東洋書林。
- Schreiber, Katharina J.
- 1992 *Wari Imperialism in Middle Horizon Peru*, Anthropological Papers No.87, Ann Arbor: Museum of Anthropology, University of Michigan.
- Sestieri, Pellegrino Claudio
- 1971 “Cajamarquilla, Peru: Necropolis on the Huaca Tello”, *Archaeology* 24(2): 101-106.
- Swenson, Edward
- 2011 “Architectural Renovation as Ritual Process in Late Intermediate Period Jequetepeque”, In I. Johnson & C. M. Zori (eds.), *From State to Empire in the Prehistoric Jequetepeque Valley, Peru*, pp.129-148, BAR International Series 2310, Oxford: Archaeopress.
- Terada, Kazuo & Yoshio Onuki (eds.)
- 1982 *Excavations at Huacaloma in the Cajamarca Valley, Peru, 1979*, Report 2 of the Japanese Scientific Expedition to Nuclear America, Tokyo: University of Tokyo Press.
- Topic, John R.
- 1991 “Huari and Huamachuco”, In W. H. Isbell & G. F. McEwan (eds.), *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*, pp.141-164, Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Topic, Theresa Lange & John R. Topic
- 1984 *Huamachuco Archaeological Project: Preliminary Report of the Third Field Season, June-August 1983*, Trent University Occasional Papers in Anthropology 1, Peterborough, Ontario: Department of Anthropology, Trent University.
- Tuni, Carlos & Louis Tesar
- 2011 “The Pikillacta 2004 Eastern Gate Offering Pit”, *Ñawpa Pacha* 31(1): 1-44.
- Uhle, Max
- 1998[1913] “Las ruinas de Moche”, In P. Kaulicke (ed.), *Max Uhle y el Perú Antiguo*, pp.205-227, Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.
- Watanabe, Shinya (渡部森哉)
- 2002 “Wari y Cajamarca”, *Boletín de Arqueología PUCP* 5[2001]: 531-541.
- 2009a 「インカ帝国における多民族・多文化状況」、浅香幸枝(編)『地球時代の多文化共生の諸相—人が繋ぐ国際関係』、pp.197-218、行路社。

- 2009b 「ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡の第一次発掘調査、2008年」『古代アメリカ』12: 123-139。
- 2010 『インカ帝国の成立—先スペイン期アンデスの社会動態と構造』、春風社。
- 2011 “Continuidad cultural y elementos foráneos en Cajamarca, sierra norte del Perú: el caso del Horizonte Medio”, *Boletín de Arqueología PUCP* 14[2010]: 221-238.
- 2012 「グリフィンは飛んでいく—動物図像から見る中央アンデス先スペイン期ワリ国家の地方支配—」『共生の文化研究』7: 73-86。
- 2013 「アンデス文明形成期の神殿社会」『人類学研究所研究論集』1: 33-52。
- 2014a 「ワリ帝国の行政センターと地方統治—ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡の事例」『古代アメリカ』17: 25-52。
- 2014b “Sociopolitical Dynamics and Cultural Continuity in the Peruvian Northern Highlands: A Case Study from Middle Horizon Cajamarca”, *Boletín de Arqueología PUCP* 16[2012]: 105-129.
- 2016 “Cronología y dinámica social durante el período Wari: nuevos descubrimientos en el sitio arqueológico El Palacio, sierra norte del Perú”, In M. Giersz & K. Makowski (eds.), *Nuevas Perspectivas en la Organización Política Huari*, pp.263-285, Andes: Boletín del Centro de Estudios Precolombinos de la Universidad de Varsovia No 9, Varsovia-Lima: Centro de Estudios Precolombinos / Instituto Francés de Estudios Andinos.
- Zapata Rodríguez, Julinho
- 1998 “Arquitectura y contextos funerarios wari en Batan Urqu”, *Boletín de Arqueología PUCP* 1[1997]: 165-206.

Keywords: offering ritual, wari, Cajamarca, *quero*